

聞名仏教

第 166 号 毎月発行
(発行日) 2024 年 7 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

癌を超克した人

佐々木蓮磨

の面影が、躍如として
いるではありませんか。

別府の鉄輪に、安波勲八
という篤信な眼科医がおら
れました。この方は近角常
観師の教化によって他力の
信心に徹し、医療で治せる
病人には出来るかぎりの
医療を施すが、医療の叶わ
ぬ病人には念仏をすすめて、
盲目のままでも立派に生き
て行ける道を教えるという
名医でありました。

ぬようになるのが当然です
が、安波氏は全く反対で、
不治の病気と知るや、まず
まず元気を出し、診療時間
を一時間早めて一生懸命に
患者を診察し、治療もして
行かれたのであります。
そこで人々は不思議に思う
て「先生は御病気であると
聞いているのに、どうして
そのように元気を出して治
療なさるのですか」と尋ね

ば声を出さなくとも、心で
御慈悲を喜んでおればよろ
しい」と申されたところ、
覚信房は「私の余命は、今
や旦夕に迫っております。
そう考えると、いよいよ御
報謝の念仏をはげまずには
おられません」と答えられ
たそうですが、今の安波氏
の態度と全く一致している
ではありませんか。

他力の信とは「ど
う信じた」「こう信じた」と
いったような人間の心の「お
もいぶり」ではなく、生き
方そのものが一変すること
です。
即ち「われ生くるにあら
ず生かされているなり、わ
れ死ぬるにあらざり引き取ら
れるなり」という立場に立
たしめられることで、この
立場こそが、疑うことので
きない人間の真実の在り方
ではないかと思えます。

胃癌という難病にかかられ
たのであります。癌にかか
られれば、死の宣告を受け
たようなものだといわれて
いますから、医師も本人に
は隠して知らせないのが常
道となっておりませう。しか
し、安波氏は、もともと医
者であるから自分の病気が
不知の癌であることを早く
も感知されました。

「私は癌という致命症にか
かっているのです、長くこの
世におることはできません。
そう考えると、今まで以上
に御報謝をせねばなりません」と。なんとという尊い、
また力強い態度でしょうか。

私の檀家に、長らく学校
の教員を勤めていた信仰の
篤い人がおります。この人
は若い頃、別府で奉職して
いるとき、安波氏と知り合
っていましたので、安波氏
が、この世を去るに当たつ
て催された「別れの宴」に
つらなつたときのことを追
想して「死を直前に控えて
いる安波氏よりも、集まっ
ていた他の人々の方が、却
って淋しそうに見受けられ
た」と語っておられました
が、いかにも信に生きる人

金剛不壊の信とは、別に
変わったものではなく、動
かぬ理法に目を醒まさせて
いただく以外にはないでし
よう。
(了)
(昭和四十年刊『信心清話』より)

普通であれば、不治の病
気と知った場合、必ず意気
消沈して、仕事も手につか

昔、親鸞聖人の門侶覚信
が病を押して上洛し、聖人
のお膝元で往生されるとき、
苦しい息の中から声高らか
に称名念仏されるので、聖
人が「病のために苦しけれ

【法味寸言】
佐々木蓮磨
一。聴聞の秘訣は、一つの法
話で満足するまで聞くこと。
いろいろ聞こうとすることは
迷いの道に入ること。

対話編

『浄土真宗』

12

A 「第十八願のお話をしています。第十八願は

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん、もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。

でした。今回は「ただ五逆と誹謗正法とをば除く」(唯除五逆誹謗正法)の個所の意味についてお話をします」

B 「第十八願は、(信ぜよ、我が名を称えるばかりで助けろ)との誓いでしたね」

A 「ええそうです。この十八願の最後の(唯除五逆誹謗正法)には三つばかりの意味があります。一つには、十八願の誓いを聞いて、(どんなに悪いことをしてもアマダ仏は救ってくださる)と受け取るのはいいとしても、ややもすると、それを盾に自分の悪を肯定してしまうことをおそれ、

そうではない、仏様は悪をきらっておられるのだということとをここでお示しになつているといわれています。五逆を造り、仏法を誹(そし)めることは罪の深いことであつて、それを仏様は嫌い悲しんでおられるのであるとのお心です」

B 「五逆とは」

A 「ことさらに父を殺す、母を殺す、羅漢(聖者)を殺す、仏身を傷つけて血を流す、和合僧(教団)を分裂せしめる、などの罪です。これを五つの逆罪といわれます。父母はこの世で一番恩になつたお方、その父母には恩に報いるのが当然ですが、逆に殺害するといふ罪です。そして真理を悟つて煩惱のなくなった聖者を殺したり、仏身に危害を加えたりすることです。真理を説いてくださる聖賢がいなくなるとこの世は全くの闇になります。そして真理を受け継ぎ伝えてきた教団を分裂させて

混乱せしめる罪は、これによつて教えが人々に伝わらなくなり、重罪です。以上の五つは地獄へ落ちる重罪といわれます」

B 「では正法を誹謗する(誹謗正法)とは」

A 「正法である仏法をそしり否定することです。これは真理を拒絶することです。そうなるとう人生の意味も方向も分からず、本當の支えもなく、善く生きようという意欲も減退しますから、ニヒリズムに陥りやすいです。ニヒリズムに陥ると利己主義的な行動になりがちで、それが高じると五逆罪を犯すことにもなりかねません。そうになると、たとえ現実に五逆罪を犯さなくても、正法を否定するならば、五逆罪を犯す可能性の中にいつもいることになり、縁が来れば何をしでかすか分

からなくなり、危ない存在です」

B 「それで仏様は(五逆誹謗正法)を嫌い悲しんでおられるのですね」

A 「ええ、ですから逆に言えば、仏様は私たちが悪をつつしむことを喜ばれるのでありましょう。一つ目は、この私たちが煩惱具足の悪しき凡夫であるという姿を指摘された言葉だと云うことです」

B 「どういふことですか」

A 「五逆を犯し正法を否定する人と仏が説かれているその人とは一体誰なのか。そのような人はどこにいるのかというと、そういう人はあなたなのだといふ様が仰せくださっていると聞くのです。他者ではないこの私の姿なのだ、親鸞聖人は仰せられているのでありましょう。真理である仏法を否定し、自己中心的な考えで生きている者、それは私であり、それゆえ心の内は虚しく、物足りたいう欲求と、それが叶わない不足を抱え、愛欲・名利・

勝他の願望に振り回されている人間、それは私のことであり、それゆえ縁があれば五逆の罪を犯しかねない危ない存在、それが汝の姿なのだといふ様は指摘される、そういう言葉が五逆誹謗正法のお言葉だとお聞きしています」

B 「そうですか。イヤといえませんがね。厳しい言葉ですが身にこたえます。私たちはいつでも自分を善い人間だと自分を肯定することしか考えていませんから、こういう言葉を聞くと反発したくなるのですが、しかし私たちのさまざまな行為は(自分の樂)を求めているといふ利己的な行為がもとになつていて、他者の幸せを心から願つてするようない行為をほとんどしてこなかったといえます。ですから悪しき凡夫なのです」

A 「真理が分からないと真理でないもの、いわば世間の中の価値あるもの、たとえば財産とか健康とか良き人間関係とか地位や名誉などを自分のよりどころにしようと思つてから、それら

のものに重心がかかり、必要以上にそれらに執着するようになる、いわばそれらを重大に見すぎないようにします。そして、逆に都合の良いものを失ったり、それらを得るのを妨げられたりすると、失望したり他者を憎んだりするようになります。それが極端になると親殺しや善き人を害するようなことまで起こします」

B 「真理が分からなくて人生の意味なり充実なりがなくなつてニヒリズムになると、いのちの中心がうつろになりますから、空虚感とか孤独感をまぬがれないですね。ですから何かで満たされようとしてイライラしたりいろいろな刺戟を追い求めたりするようになるのですね」

A 「そうですね。それと、親鸞聖人は十悪を毎日のように行うことも五逆の中に入るのだといわれます」

B 「十悪とは」

A 「殺生（殺し）・偷盗（ぬすみ）・邪淫（不倫）・妄語（綺語・悪口（あつく）・両

舌・貪欲・瞋恚・邪見です。うそ・いつわり・中身のなにかざる言葉・乱暴な言葉、仲違いさせるような言葉など言葉の悪が多いですから、これは日頃よく行っていることです。邪見は因果を信じてないことで、悪いことをしても報いなどはないという横着な考えです。こういうやりながら日々行っていることは五逆罪を行うに等しいといわれるのです」

B 「私たちは言葉の悪には鈍感ですね。こういうことは教えられないと自分の為している悪には気づかずに、自分は（悪いことはしていない）と自己高挙（たかぶり）に陥ってしまいます」

A 「それから三つ目には、この言葉は私が正法をそしり、否定し続け、現在も仏法を受け入れない、そういう仏法に反逆している者だということをお知らせくださるのです」

B 「この場合、仏法というのは」

A 「私たちにとって、仏法

は弥陀の本願、念仏往生の願であり、本願の念仏です。念仏往生の願は（汝のそのままを引き受ける、助ける）の仰せであり、これを受け入れない、信じない、疑つてやまない、そういう姿を誹謗正法というのです。ご本願に常に喚ばれてきたのですが、それを信受することがなくて流転してきて、この世に生まれてもなお本願をはねつけているのです。これが私の姿なのだと言えてくださるのです」

B 「アミダ仏は、私を本願を否定し続けてきた者として見られているのですね」

A 「そうなんです。本願を否定し続けてきたゆえ、汝は救いから自分で自分を除いている。それを、救いから除かれた存在だといわれるのです。それゆえ（唯除）つまり救いのかぎりではない、救いのない存在だといわれるのです」

B 「アミダ仏はすべての衆生を救いたいという願を建てられ、それを成就してアミダ仏になっておられるの

に、私たちは救われないのはここにあるのですね」

A 「アミダ仏は（汝のありのまままで救う）という無条件の救いを成就して私たちに喚びかけはたらきかけておられますが、この救いを私たちははねのけ、否定して、誹謗し続けてきたのです。アミダ仏が（汝のよくなる者は救わない）と仰せられるのはありません。ここはよく聞かないと間違えます。アミダ仏は（ソノママナリデ助ケル）と喚びかけてくださっているのに、それをはねのけ、無視し続けてきたのです。いわば救いを自ら拒絶して、自らの救いを自分で除いてしまっているのです」

B 「南無阿弥陀仏とすでに私たちにはたらきかけ、喚びかけておられる、その救いのみ手を拒絶し続けてきた私に、（救いから除かれた者）と悲しんでおられるのですね」

A 「アミダ仏は（汝助からぬ者よ、汝救い無き者よ）と仰せられる、それを聞いて（ああ私は助からぬもの

である）と知らされる。仏に教えられなくては自分が助からぬ身であることなど到底分かりません。分かりませんから、（今はまだダメである、これからもつとつと聞いていけば助かる身になる。分かるときが来る）となお未来に期待をかけていくのです。しかし、いつまでたってもそういう時は来ない。教えの言葉を聞きつけていくと、いよいよ（汝、助かる縁の無き者よ）というお言葉によって、これが我身の本性であることが身にしみて知られるのです」

B 「この（唯除く）という言葉によって、救いから除かれた存在であることを知らされるのですね」

A 「ええそうです。救いの絶えた身であることが知らされる。ところが助からぬ身の私に、なお逃げる者を追いかけて捉まえてくださるように、私のところに南無阿弥陀仏とあきもせず喚びかけてくださる。その喚び声は（助からぬ汝を助ける親がここにいる）との南

無阿弥陀仏のお声でありま
す。〈助からぬ者だからこそ
引き受ける〉とまで仰せら
れ、摂取したもう如来様だ
つたのです。もはやこの南

無阿弥陀仏様にまるまる引
き受けていただくほかには
ありません」

B 「逃げ回っていた私ごと
うとうアマダ仏に捉まって
しまうのですね」

A 「ええ、〈乃至十念・若不
生者・不取正覚〉の〈我が
名を称えるばかりで助ける〉
は、救いの望みの絶え果て
た者を焦点にかけられてい
る誓いなのです。〈我が名
を称えよ〉はそのまま〈ま
るまる助ける〉の仰せだつ
たのであり、それを聞いて、
〈ああアマダ様なればこそ、

この無信の私を助けてくだ
さる、ようこそようこそ〉
と聞くとともに、不思議に
アマダ仏と離れない我身が
知らされるのです」

B 「アマダ仏の大悲に浴す
るところにアマダ仏と離れ
ない我身を知るのですね」
A 「ええ、それを摂取不捨
の利益といい、これが真宗
の救いの実際なのです。そ

れを教義的に言う〈弥陀
の本願を信じる一念に摂取
不捨の利益に預かる〉とい
われるのです」

B 「ところで〈唯除五逆誹
謗正法〉の仏語によって、
自らが救いから除かれた存
在であると知らされる〈機
の深信〉ことと、私たちが
聞法する中で、我欲と怒り

の多いものであり、妬みと
うぬぼれやすい存在であり、
差別して止まない存在であ
るなどという煩惱だらけの
存在であると知ることと同
じなのでしょいか」

A 「必ずしも同じではあり
ません。煩惱の多い、悪の
多き存在であることを知る
といつても、自己反省を重
ねることによって、煩惱の
深い存在であると知ってい
くことは充分あります。し
かしそれが必ずしも〈機の
深信〉ではありません。自

己批判が深まって自分の心
が煩惱にまみれていると知
つても、それは自らが助か
らぬ存在であると知ること
と一つとは必ずしもいえな
いのです」

B 「自分の悪が見えたのは
アマダ仏にであったからだ
という話をよく聞きますが」

A 「自己批判による自分の
姿は知性の光によって知ら
されたとはいえても、アミ
ダ仏の光にであったとは必
ずしもいえません。自分の
知性にも自己を照らすはた
らきがあるからです」

B 「では機の深信とは」
A 「それは善導大師が言わ
れているとおり、

〈自身は現にこれ罪悪生
死の凡夫、広劫より已来、
常に没し常に流転して、出
離の縁あることなし〉と信
ず。

であつて、単に罪悪の身、
煩惱具足の身と知ること
はありません。出離の縁あ
ることなき罪悪の身とい
うことを知らされること
です。

疑い深く出離の縁なき身、
迷いの世界を脱出すること
のできない救いなき身と知
らせていただくことです。
これは自分の知性では知れ
ません。仏の言葉によって
知らされるのです」
B 「救いから除外された身

ということはお出離の縁なき
身ということなのですね」
A 「ええそうです。そんな
私に念仏往生の願の仰せを
聞くのです。〈極重悪人よ、
唯御名を称えよ、それだけ
でよい、その外に何もいら
ない、まるまる助ける〉の
南無阿弥陀仏の仰せを聞く
のです。救われぬ身がその
ままなりで救われるのです」

B 「そうすると〈唯除五逆
誹謗正法〉の仏語には、一
つには仏様は悪を嫌いたも
う、それゆえ悪を慎むこと
を望みたもうこと、二には
私どもが罪悪の深い身であ
ることを知らせたもうこと、
三つには、私たちは弥陀の
本願を信じない、阿弥陀仏
の救いを疑う救われ難き身
と知らされることなのす
ね」

A 「ええそうです」
(了)



【住職雑感】

六月四日、親戚

の納骨に読経をしてほしいというこ
とで、はるばる岡山県津山市まで坊
守の車で出かけた。七十年ぶりに墓
場近くの親戚の実家まで行く。小学
生の頃、松茸狩りに来たところであ
る。親戚の施主は現在芦屋市の老人
ホームに入っている。九十二歳で、
今回息子同伴で故郷の墓に来た。施
主のいうのに、老人ホームの入居者
たちは「皆、死にたい死にたいとい
っている」という。「死にたい」と
いつても「本当は生きたいのだ」と
よくいわれてきたが、しかし「死に
たい」というのも単なる口先だけと
は思えない。実感でもあろう。人は
死にたいと思っても死ねず、生きた
いと思っても生きれないというのが
因縁の道理であつて、自由に生きる
こともできないが死ぬこともできな
い、不自由なのが人生のすがたであ
らう。「いつまで生きても良いがい
つ死んでも良い」という死生観が望
ましい。法要の後、近くの老人ホー
ムに入居している義母（九十八歳）
を見舞った。元気にしていて大変喜
んでくれた。それこそ一期一会であ
る。また会えるかどうか分からない。
その夜は近くの湯郷に泊まった。丁
度「蛍祭り」で小川に乱舞する蛍を
しばし眺める。神秘そのものであつ
た。蛍を見るのも十数年ぶりである。